

祈り：「本」で祈る

1) 「祈り」とは？

片山はるひ（ノートルダム・ド・ヴィ）

<http://www.ndv-jp.org/>

<https://www.youtube.com/channel/UCdK7SOjXPSA0IDrBvGipmQ>

（祈りや信仰生活についての動画を載せた Notre Dame de Vie の Youtube チャンネル）

祈りとは、「自分が神から愛されていることを知りつつ、その神と二人だけで、たびたび語り合う親しい友としての交わりにほかなりません。」

（アビラの聖テレサ、教会博士）

2) 読書の重要性

「真に知る時、人は火のように愛する」

フォーリーニョの聖アンジェラ

・人は知らないものを愛することはできない。そして「愛はその愛するものを、しきりと知ろうとする。」

（『わたしたちの念祷』 p.123）

- ・小さきテレーズは、福音書を読み、「神さまの性格を知ろう」と努めた
- ・読書の軽視→単なる情感的な祈り→「栄養」の不足から祈りは次第に味気なくなり、力も光りもないので、利己的なセンチメンタリズムの中に迷い込む危険
- 自分の心配事や、いやな思い出や、あれこれの想像の中にはまり込んでしまう

★ 啓示された真理の知識という糧なしには、信仰は成長しない。

★ 現代の最も大きな障害は、**宗教的無知**である。

・「信仰が魂のうちにいつもいきいきと脈うち、生活の中で実際に効果をあげているためには、それは十分に照らされ、十分に強くなければならない。（…）信仰を照らす光が、その信仰の持ち主の知的な力や教養に比例するのでなければ、信仰はその人のなかで、その役割を果たすことはできない、（…）まして深い霊的生活の支えになるなどとはとうてい望むことはできない。」（p.130）

★ 祈りのとき、本を携えて祈る。→散心の時の「武器」となる。祈りながら読む。神とのコンタクトが達せられたら、読むのをやめて祈りに専心する。

この聖書のことばを
よほん
うかがわからみりたいたいものだ
ひとつひとつのことばを
わたしのからだの手や足や
鼻や耳やそして眼のようにかんじたいものだ
ことばのうちがわへはいりこみたい
八木重吉

3) 「生きた本」 イエス・キリスト

・アビラの聖テレサの場合：カスチリア語の本が禁書となる。ラテン語が読めないテレサは本を読むことができなくなった。→キリストの vision（示現）のはじまり

「わたしは生きた本をあなたに与えよう」キリストが生きた本となって現れてくださった。

・「すべての霊的な知識はイエス・キリストのうちに納められている。かれこそ、永遠のみことばである。」(p.135)

・「永遠のいのちとは、唯一まことの神であるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。」(ヨハネ 17. 3)

・vision がない場合には、学問がその代わりとなるべきである。祈りの「糧となるもの-つまり、イエス・キリストとの絶え間ない、そしてやさしい愛情のこもった親しさ-が、わたしたちの日常生活のうちに生み出され、続いてゆくためには、生きたキリストを知り、その生活されたとおりにかれを見、内的外的のどんな状況のもとに、どのようにキリストが行動し、語られたかを知る必要がある。また、感覚から知性の深みに至るまでのわたしたちのあらゆる能力が、このいきいきとした具体的な知識で満たされていなくてはならない。」(p.138-139)

・キリストについて生きた深い知識を得るためには、(…)ただ思弁的に学ぶだけでは足りない。どんな些細なことにも関心を持ち、一見重要でない言葉や挙動も取り上げてそこに深い意味を読み取る手がかりとし、(…)さらに深い親しさの中に入っていく愛の「絶え間ない心づかい、生むことを知らぬ堅忍、非凡な洞察力」(p.140)が必要である。

4) 本を選ぶために

A) 聖書：「読み、かつ黙想すべき第1の本」 神の靈感により書かれた本、

B) 教理的な本（キリスト教の教え、教義 (dogma:信仰内容)、神学

C) 霊性の書

★共に学び、分かち合うことのできる仲間の必要性。

<お勧めの本>

・幼きイエスのマリー・エウジェヌヌ修女『わたしたちの念祷』いつくしみセンター

<今日の講話は、この本の第4章「霊的読書」に基づいています。>

・『キリスト教入門』オリエンズ宗教研究所

・『聖書入門』オリエンズ宗教研究所

・ペトロ・ネメシエギ『キリスト教入門』南窓社

・『カトリック教会の教え』カトリック中央協議会

・『カトリック教会のカテキズム』カトリック中央協議会

・ベネディクト十六世『イエスの祈り』ペトロ文庫、2012年。